

吃音解決求め初の国際大会

真の吃音(きつおん)問題解決とは何かをメインテーマに、このほど「第一回吃音問題研究国際大会」(全国言友会連絡協議会など主催)が京都市で開かれた。

海外からの三十四人を含む約四百人の吃音者、治療者、研究者が熱心に意見を交換した。

吃音研究の權威で言語病理学者のヒュゴー・H・グレゴリー教授(米)の「吃音の問題と展望」と題する学術講演をはじめ、シンポジウム、フリー・トークなどが数多く持たれたが、吃音のとりえ方について、参加者の意見が大きく二つに分かれたのが興味深かった。

吃音は、どの国でも人口の1%に発生するといわれるが、原因は解明されておらず、治療方法も確立されていない。「治る」という人がいる一方で「成人吃音が完全に治る」という考えは非現実的だ」という厳しい見方もある。

吃音者の自助グループ、全国言友会連絡協議会の伊藤伸

二会長が「治療で一時的に治っても何かのきっかけでまたどもり始める。治そうとする時間とエネルギーをそのまま社会にぶつけ、積極的に生きるようにすべきだ」と発言すると、研究者側の日本吃音治療教育連盟の望月勝久事務局長は「中には治る人もおり、治療方法を追究したい」と反

る。症状が改善しないのは、この方法をとれば、四分の三以上の吃音者に効果がある。早く話さなければならぬと緊張せず、ゆったり話すようにする③「あの」「ええ」となどの使い方に慣れる④声の大小、抑揚や速度を変えて積極的な話し方を身につける⑤などを組み合わせる。

自分自身が治療者に 家族など理解も大切

論。参加者(ポーランド)からも「吃音者であることを肯定したい人はそれでもいいが、治療も必要だ」という意見が出た。

自身も吃音者だったグレゴリー教授は「私のクリニックでは、吃音症状をなくせという考えと、どもつてもいいからもつと話そう、という二つの考えを結合した治療法で効果を上げている」と次のような実践例を紹介した。

まず吃音症状を正確に把握したうえで①意識的にどもつてみて、原因を自分で理解す



吃音問題解決に向け意見を交換する参加者たち

治療に対して精神的な拒絶反応を見せる人に多い

同教授はさらに「難しいのはクリニックでの成果を実生活に生かすことで、一年程度の習熟期間には自分で自分の治療者になる覚悟が必要。私も大学時代、自分の話し方が変化する過程が分かった時に、初めて吃音を克服できた」と体験を語り、「この時期の私の周囲には、私を人間として理解しようとしてくれる人がいて幸運だった」と、家族や周囲の理解の大切さを強調した。

吃音者グループと専門家の協力関係について、グレゴリー教授は「自助グループは、自分自身が自分の治療者になるための助けになるべきで、中にモデルになるような人がいるのが理想。逃げ場になっではないけない。自助グループにとっても専門家の知識や経験はプラスになるはず。いい協力関係を作っていくのがこれからの課題だ」と強調した。

参加者たちは「吃音者、治療者、研究者の三者が互いに情報を交換、批判し合ってもに歩んでこそ、真の吃音問題解決に迫れる。世界に呼び掛け解決のための輪を広げよう」との大会宣言を採択した。